

個人化論—個人と社会は “結びついて” いるのか？

三上 剛史 追手門学院大学 教授

我々が個人と社会との関わりを問うとき、一般的には「社会は個人から成り立っており、個人があって始めて社会がある」とか、「個人は社会の産物であるから、まず社会があって、個人は其中で育つ」とか言う。

前者は、個々人の目標・価値設定や合理的な手段選択の連鎖によって社会が出来上がっているという考え方である。後者は、そもそも人間は家族や地域、国家などの集団の中に生まれ落ち、そこでの価値観や倫理観を身に着けることで社会集団の一員となるという見方である。社会学では前者を「方法論的個人主義」、後者を「方法論的集団(集合)主義」と呼び慣わしてきた。

20世紀の始めにはすでに出揃っていた二つの視点は、どちらか一方が優勢というわけではなく、それぞれの観点からお互いの視点の持つ利点を生かす形で、学問的成果が蓄積されてきた。方法論的個人主義は個人の自由選択を尊ぶリベリズムが好み、方法論的集団主義は共同体を重視するコミュ

ニタリアンが採用する。

見かけの上では、二つの立場は対照的な理論的対立を示しており、しばしば政治的にも対立することになる。しかし、実は共通点がある。個人と社会のどちらから見るかの違いはあっても、個人と社会を“結びつけ”ようとする姿勢において二つの視点は共通している。実際、社会学はその成立当初から、両者に共通する“いかにして個人と社会を結びつけるか”という学問的志向性によって成り立っていた、と言っても過言ではないだろう。

だが、近年の社会とそこに生きる人間を見ると、これまでと同じ観点から個人と社会を眺めることに限界を感じる。社会学やその他の社会科学が依拠してきた“結びつけ”の視点を今後も引き継いでゆくのは難しいのではないか。そして次のような問いが頭をもたげる—現代の個人と社会は、“結びついて”いるのではなく、むしろ“切れて”いるのではないか？

この問題を考えようとするとき、そもそも「個人」と「社会」という概念が近代的なものであることを念頭に置かなければならない。いわゆる「ポストモダン」で、「近代」と言えば何でも批判する風潮もあるが、ここは慎重に、二つの言葉が近代社会において果たしてきた役割から再考してみたい。

ごく大雑把な捉え方が許されるなら、近代への離陸と共にまず個人の概念が形成され、社会の概念は19世紀に、現在使用されているような意味を持つ言葉として成立したと言われている。前近代社会（なんとも雑駁な概念であるが、ここではこの表現を許していただきたい）において、我々が考えるような意味での「個人」や個々人の「アイデンティティ」というものが存在しなかったことはよく知られている。19世紀末から20世紀始めにかけて活躍し、社会学と人類学に大きな影響を与えたマルセル・モースや、文明化の理論で知られるノルベルト・エリアスなどもそう指摘している—18世紀から19世紀にかけて、「互いに共通して持っている《我々アイデンティティ》よりも、人々が自分と他者を区別する《我々アイデンティティ》に高い価値を与えることが社会の特徴となった（ノルベルト・エリアス：『諸個人の社会』）。

個人という概念の成立は、哲学や思想史

の課題として追究されてきたが、この概念がなぜ要請されたのかを社会的に見るならば、以下のような説明の仕方が可能である。共同体と身分社会の中に埋没していた人間達が、各々に異なった職業を持った労働者となり、自らの選択によって居住地を定め、それぞれが自分の家族を持つようになったとき（それを近代社会の成立と呼んでいるが）、個々人が自分独自の目標や価値観、ライフヒストリーそして「自我」と「アイデンティティ」を持つようになる。

イギリスのブレア政権のブレインでもあったアンソニー・ギデンズは、これを前近代社会からの「脱埋め込み化」と近代産業社会への「再埋め込み化」という言い方でうまく表現している。諸個人は、農村共同体と身分社会という前近代社会のシステムから脱埋め込み化されて、新たに近代的個人として産業社会の中に再埋め込み化され、自律的主体となったという図式である。

このような近代的個人が産業社会を形作っていったという議論の先駆けが、例えばマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であるし、そのようなシステムが、実は人間を近代の枠に嵌めて教育する権力的装置によって可能となっていた、と唱えるのがミッシェル・フーコーの『監獄の誕生』であった。

19世紀になると、その近代的個人が「社会」という存在と向き合うことになる。自由で平等であったはずの個人は、産業社会のシステムの中で、様々な社会的限界や壁に取り巻かれ、共同体的構造とは異なった性質のシステムに再埋め込み化されていた—それを「疎外」という言葉で表現する人々も居た。この新しい近代社会には色々な名前が与えられたが、例えばフェルディナント・テンニースは「ゲマインシャフト（共同社会）からゲゼルシャフト（利益社会）へ」と呼んだ。

社会という概念を要請することによって、我々は共同社会と利益社会を区別し、コミュニティ（共同体）とアソシエーション（組織集団、結社）の関係や両者の移り変わり、共存を問うようになるのだが、そこにおける社会学的関心のターゲットは、新たに意識されるようになった「個人」と「社会」をいかにして結びつけるかということであった。実際に結びついていたのであり、だからこそそれを理論化したのであるが、最も整合的で綺麗な図式を作ったのは、20世紀中盤を代表する社会学者としてよく知られている、タルコット・パーソンズだろう。

それは“社会の共有価値を内面化した諸個人が社会を作る”という理論モデルである。諸個人は社会の中で、その社会に共有され

た価値・規範・目標などを内面化し、それを実現すべく主体的に行為することで社会秩序が維持・発展させられる。このようにして、個人と社会は共有価値とその内面化という形で理論的にも結びつけられた。

20世紀の終盤に至るまでの産業社会は、およそこの理論図式にあてはまる構造をしていたし、個人は産業社会と国民国家に包摂されながら、近代的価値を実現する自律的なアイデンティティを持つ主体としてあった。だが、今やそうはゆかなくなった。新たな「個人化社会」の到来である。

近年の「個人化」論は、リスク社会論で有名なウルリッヒ・ベックや、『リキッド・モダニティ』で知られるジークムント・バウマンなどが提唱している「新しい個人化」である。近代社会がそもそも個人化の時代であったのに、なぜ今わざわざ「個人化」社会と呼ばねばならないのか。それは個人のあり方と、社会のあり方、そして個人と社会の関わり方が、これまでとは異なるからである。

20世紀も70年代を過ぎると、「脱産業社会化」と情報化、消費社会化が進行し、いわゆる「ポストモダン」の時代となる。常に新たな差異を生み出す流動性の激しい情報化された消費社会は、一方で個人のアイデンティティ（いつも同じ一つの私）意識を曖

味化させ、他方では、近代的な社会規範や制度（家族、地域、会社、学校etc.）の枠組みと信憑性を揺らがせ、グローバル化の進展によって加速的に近代的システムが制度疲労を起こし始める。

この時、個人と他者、個人と組織・集団の関わり方、あるいは集団と集団の関わり方などが流動化し、新たな変容に向けて、常にその境界線を書き換える必要に迫られることになる。家族然り、ジェンダー然り、学校然り…。グローバル化の中では国民国家すらも例外ではない—ベックのお膝元ドイツもEU内の様々な問題に悩まされている。

同時に、常に新たな変容を迫られる諸個人もまた、流動的で多様な自己のコーディネートを求められ、差異化に向けて開かれた自分を保持し、差異化しつつある社会との関係を自覚的に操作することを求められる。ここでは、これまでのような個人と社会の結びつきは希薄化してゆく。

現在の個人化は「百年前にそれが意味していたこととは全く違ったものを意味するようになってきている」（ジークムント・バウマン：『個人化社会』）。その個人化は、負の側面を見れば、グローバル化した消費社会に蔓延するナルシスティックな個人主義や、リスクへの個人的対応を強えられる「自己責任」という面も持つが、もはや個

人が何らかの所属集団によって説明される存在ではなくなりつつあり、その意味では個人というものが、純粹に個人の意志とパフォーマンスによって成り立つカテゴリーとなったとも言える。単なる社会の構成単位ではない個人が初めて生み出されているという見方もできる。

現代フランスのある社会学者は「行為者とシステムは別れたのだ」と言う。政治・経済や法、科学などの諸システムと行為者個人とでは、その構成原理が異なっており、二つの別個の存在だと認識すべきだという主張である。妥当な指摘である。ここではそれをもう一段進めて、“個人と社会は別れた”と言っておいてもよいのではないかと思う。

現代社会の現実には、多くの個人化論者が唱えるよりも遥かに先を行っている。これまでパーソンズの理論図式にイメージされるような仕方で、麗しき包摂と予定調和の関係にあった個人と社会は、それぞれが別個の論理で動くシステムとして分離され、一方が他方に依存したり支配・従属関係に立ったりする存在ではなくなりつつある。

だからと言って、現代社会が不安的で危うい状態にあるわけではない。実際のところ、「社会」は経済や法・政治、科学などのシステムによって（様々な問題は抱えながらも）効率的で高いパフォーマンスを遂行

している。そこには、個人の意のままにはならない貨幣の論理や法の論理、科学の論理などが厳然として存在し、だからこそ安定したシステムとしての自律性の高い社会運営が可能となっている。

個人はどうか。中心と頂点のあるアイデンティティ型の自分を生きた近代人に比べると、現代人は、あたかも自分がその場その場の状況や相手に応じて自在に分割できるかのようなあり方をしている。幾つもの私は、そのどれもが、それぞれの状況に応じた「本当の自分」であり、それらを統括する中心的自分が存在するとは想定されていないことが多い。現代の個人は内面化された社会規範によって自己をコントロールしているのではなく、そのつどの状況に合わせて、自己をコーディネートしている。

この場合、そのような自己のパフォーマンスは「自分」を基準として、「自分」という、様々な自己の集合体である固有のネットワークに組み込むことが可能な範囲で遂行される。加えて、現代人の自己意識は恐らくこれまでのいかなる時代の人間よりも強く、決して譲ることのできない「自分らしさ」や、受け入れがたいものへの強烈な嫌悪、独自のこだわり等々、ある意味で、強固に閉じた自分を形成してもいる。

もちろん、他者と共有できる部分や、社

会に包摂されている部分が存在しないわけではないが、多くの人間は、相対的に独立した、社会や他者と共通する部分を前提としないスタイルをとっているのではないか。

地縁や血縁で結ばれていた前近代社会、社会的価値や道徳規範で結ばれていた近代社会と比較すると、現代の個人は、さしあたり何かを誰かと共有しているのではなく、したがって、初めから何かで結ばれているのではなく、むしろ、社会や他者から“切れている”ことを初期状態としてコミュニケーションを行っていると言えそうである。

「コミュニケーション能力」がとりわけ重視される昨今であるが、我々がコミュニケーションするのは、お互いが分からないからであり、初めから結合しているという前提などないからではないのか。結びついているなら、わざわざコミュニケーションを強調する必要はない。そう言えば、「コミュニケーション」という言葉が多用されるようになったのは1980年代頃からだと記憶している。公共性論において、社会的合意とコミュニケーションとの関わりを強調したユルゲン・ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』も、1981年刊行である。

その頃から、我々は自分が考え感じていることをきちんとコミュニケーションする

ことに意を碎かねばならぬ存在になったということであり、言い換えれば、それだけ他者が不明瞭な存在となり、また、どこかの集団への所属や社会的地位・役割だけでは了解し合える部分がわずかでしかなくなった世界が出現したということだろう。

このことは、家族や親密な人間同士の間でも同様であり、むしろそのような親密な間柄ほどいっそう深刻なコミュニケーション・ギャップや心の行き違いに悩まされることになる。今や家族でさえ、無条件な絆で結びついた集団であるとは言いがたくなってきつつある。文化の違いや情報化の進展による差はあるだろうが、新しい形で個人化の波は確実に拡がりつつあるように見える。

現代の個人と社会の関係は、一方における政治・経済・法・科学などの機能的な社会システムの自律化とネットワーク、他方での閉じた個人意識の鮮明さという対比によって成り立っていると言えるだろう。社会は、個人のレベルを超えた独自のコミュニケーションのシステムであり、個人の論理とは全く異なった論理によって成り立つシステムである。そして個人もまた、自分独自の「私」という閉じたシステムによって成り立っている。

そのような閉じた諸個人が、それゆえに

こそ、言語や貨幣や愛や権力や…などのコミュニケーション・メディアを用いて接触しようとする。つまり、個人と社会は“切れている”からこそコミュニケーションし合うのであり、“結びついている”という甘い前提を離れたところでコミュニケーションを取り結ぶ。そのような度合が高まった社会に我々は生きているように思われる。

個人と社会の関わりをこのように考えたほうが、これからの社会設計としてはふさわしいのではないか。個人と他者、個人と集団、個人と社会が“結びついて”いる、あるいは結びつくべきであるという想定は、いったん手放したほうがよさそうである。そうでないと個人は、自分とは全く異なる存在である他者や集団、自分の意図を超えたシステムである社会との間で、過剰な負担を強いられ、「仲良くせねばならない」、「信頼し合って共生せねばならない」などの重圧を受けて、息苦しい生活を強いられることになるような気がする。

個人と社会が“結びついていない”ことの自覚は、決して社会を信頼しないということではないし、組織や集団から孤立するということではない。他者を愛さないということでもない。分離していることを見据えた上で、なおかつ相互のコミュニケーションが可能になっていることの意味を再認識し

なければならない。作り物の“結びつき”は
却って危うい。

プロフィール.....

みかみ・たけし 1952年京都市生まれ。京都大学文学部卒業。同大学院文学研究科博士課程中退。神戸大学大学院国際文化学研究科教授を経て、現在、追手門学院大学社会学部教授。社会学専攻。博士（文学）。主な著書に『社会学的ディアボリズム』（学文社、2013年）、『社会の思考』（学文社、2010）、『道徳回帰とモダニティ』（恒星社厚生閣、2003年）、『ポスト近代の社会学』（世界思想社、1993年）など。